

大学間学生交流における SNS の活用と課題

松田岳士*、樋口浩朗**

*島根大学 教育開発センター

**山形大学 大学連携推進室

mat@hirc.aoyama.ac.jp

概要：本発表は、東北地方と近畿地方の大学の間で行われた学生交流事業において SNS が果たした役割と課題を考察するものである。SNS は交流に参加した両校の学生が自由に使えるコミュニケーションの場として開発され、相互訪問による交流活動終了後に積極的に使用された。また、SNS は主に同じ大学内の学生同士の情報交換・共有や参加学生個人の資料保管場所などの用途に使われた。さらに、閲覧（ページビュー）と書き込み（エントリ）数の推移を時系列でみると、異なる傾向を持っていることも確認できた。

1 はじめに

本発表では、約半年にわたる大学間の学生交流事業において、学生が自由に使えるように構築された専用 SNS (RixY) がどのように使われたのかを検討し、PBL (Project Based Learning) におけるソーシャルメディアの役割や、ファシリテーションの方法について考察する。本稿では、まず、交流事業の概要と著者らが想定した SNS の位置づけを紹介し、その後、SNS が実際にどのように使用されたのかを分析する。これによって、遠隔地の大学同士が交流する PBL が抱える課題を解決するために ICT がどのように貢献できるかを探る。

本発表の背景となったのは東北地方の国立大学である山形大学（以下、山形大）と、近畿地方の私立大学である立命館大学（以下、立命大）との間の学生交流事業である。山形大と立命大は、相互交流協定に基づいて、平成 20 年度から学生同士の相互交流事業を展開しており、学生主体型 FD（平成 20 年度）、最上川学（平成 21 年度）をテーマにお互いの大学を訪問して、両校の特色を踏まえた実践的な学習を展開してきた[1]。

平成 21 年度までの交流から、PBL として克服すべき課題のいくつかが明らかになり、そのうち、平成 22 年度には次の 2 点を改善しようと試みることになった。

- 1) 空間的、文化的な差が大きく、事前・事後交流がうまく展開できない。
- 2) 活動を記録し、共有する仕組みがない。

また、取り組む課題についても見直し、これまでのように片務的にならないよう、両校が共通に

抱えている問題を取り上げることにした。担当者間で調整した結果、平成 22 年度は、「大学の地域への貢献」を学習テーマとして、大学キャンパスの立地する地域・市民にとっての大学の役割やその地域にどのように受け入れられているかについての調査を共同で実施し、今後の地域貢献のあり方等について検討することを申し合わせた。

これは、両校ともキャンパスが分散しているという事情を踏まえたテーマ設定であり、山形大の 3 つのキャンパスと立命大の 2 つのキャンパスおよびその周辺地域を訪問することとした。また、平成 21 年度に実施できなかった相互訪問を復活させ、共同で活動することを申し合わせた。

さらに、これまでの交流と比べると訪問地域が多数になること、参加学生が決定してから相互訪問まで半年近くあること（表 1）、キャンパスを出て周辺地域で行う活動があることなどから、相互訪問を充実したものにするため、訪問前の学習を設定した。これに加えて大学内・大学間の情報交換、共有の仕組みを学生が利用できる形で構築することも決定した。

表 1 主なスケジュール（平成 22 年度）

月	イベント	内容
4	参加学生募集 (両校 6 名ずつ)	キャンパス間のバランスを考慮して選考
6	SNS 設置	SNS 上の交流開始
9 上	相互訪問	立命大学生山形訪問
9 下		山形大学生近畿訪問
12	成果発表会 (東京)	両校学長・総長出席のもと成果発表



図1 使用された SNS

2 設定された SNS

2.1 導入の経緯

改善点や新たな交流テーマを前提にして、学生同士の情報交換・共有の方法を検討する中で、主に両校の地理的制約から、操作が複雑でなく、非同期分散環境で使用できるオンラインソフトを用いる案が認められ、平成 22 年の 2 月から 3 月にグループウェア・SNS・掲示板などを比較検討した。その結果、文字メッセージ・画像・ファイルなどが容易に交換可能で、携帯電話からのアクセスを設定でき、しかも導入にあたって大学側に経済的負担が少ないオープンソースの SNS を使うことに決し、これまでに高等教育機関で活用された事例が報告されている[2]、[3]、OpenPNE[4]をベースとした SNS を ASP を利用して構築することとした(図 1)。

その後、4 月から 5 月にかけて、最終仕様や予算を決定し、教職員のかかわり、デフォルトコミュニティの設定などを含む運用規則・運用方法を取り決めた。5 月中旬には試用版が立ち上がり、試験運用と改善を経て、6 月から実際に使用可能になった。

2.2 機能・期待された役割

SNS に実装された機能は、プロフィール公開、マイフレンド登録、日記、ブログ(外部ブログへのリンク)、スケジュール管理、コミュニティ、アルバム(写真公開)、個別のメンバー間のメッセージなどであった。標準的な SNS と異なる点は、活動参加者(交流参加学生と両校の担当教職員)以外には「閉じている」ことであり、全員が実名で参加し、友人を招待することなどはできない設定となっていた。

SNS には、先に述べた情報交換・共有のツール

としての役割以外にも、学生同士の人間関係の調整、バーチャルコミュニティへの参加による活動動機づけなどの役割が期待された。

3 SNS はどのように使われたか

SNS が使用されたのは 6 月中旬から 12 月末までの約 6 年半であり、表 1 にあげた日程を勘案して、あらかじめ次の 3 期を想定し、SNS を媒介として学生の活動を支援することとした。

● 第 1 期(6～8 月：11 週間)

SNS の立ち上げから相互訪問が開始される前までの時期である。この時期には、学生同士がお互いを知り、コミュニケーションのベースを作ることと、相互訪問時にどのような活動をするのかを決定する必要がある。そこで、アイスブレイクのためのタスク(自己紹介やこの SNS の名称決定など)を指示したり、教職員が率先して日記を書いたりする支援を行った。

● 第 2 期(9 月：5 週間)

相互訪問の期間である。この時期には訪問時の活動が記録されることが期待される。そこで、教員が積極的にコミュニティへ活動への感想等を書き込み、コミュニティ機能の使用を促した。

● 第 3 期(10～12 月：12 週間)

訪問活動の成果をまとめ、発表会の準備に取り組む時期である。この時期には、参加学生が全員顔見知りになっており、SNS の使用にも慣れ、しかも発表会という目的がはっきりしているので、SNS を通した活動は活発であると考えられる。

また、3 つの期間を通して、SNS を使用することによってポイントが積算され、メンバーとしてのステージが上がっていく(シルバー→ゴールド→プレミアム)機能も稼働させておいた。

3.1 全体的な使用状況

学生の発言数(日記、コミュニティ)の合計は、山形大 890、立命大 150 で山形大の学生が立命大の学生を大幅に上回った。この理由として、立命大は参加学生 6 名のうち 2 名が途中から加わり、交流終了後に利用を始めたことや、学生のうち 1 名は日記欄に自らの Twitter への投稿が反映される設定にした(合計発言数から Twitter での発言は除外してある)ことなどが影響していると考えられる。

次に、パソコンと携帯の利用頻度を比較するた

めにページビューを見ると、携帯からは 5913（うち学生は 5700）、パソコンからは 17619（学生 17019）とパソコンが 3 倍ほどであった。

3.2 時期別の状況

表 2 に示したように、ページビュー、書き込みともに第 3 期に最も活発に利用された。第 3 期は相互交流が終わり、12 月の成果発表会を目指して発表資料をまとめていた時期であり、この時期に SNS が最も多く活用されたのは事前の予測にも合致する自然な結果であると言える。また、パソコンと携帯の使用傾向には大きな差がなかった。

第 1 期と第 2 期を比べると、ページビューでは第 1 期の方が多いにもかかわらず、書き込みでは第 2 期が第 1 期を上回っている。第 1 期は、自己紹介に始まり、お互いの人間関係を築く時期であるため、学生は積極的に書き込むと言うより、他の学生や教職員の書き込みを読み返したり、SNS の様々な機能を試したりしていたと考えられる（図 2、3）。

表 2 時期別使用状況

時期	ページビュー		エントリ	
	パソコン	携帯	日記	コミュ
1	6640 (604)	1544 (140)	96 (9)	63 (6)
2	2649 (530)	652 (130)	89 (18)	50 (10)
3	7730 (644)	3504 (292)	431 (36)	394 (33)

（注）（ ）内は一週平均

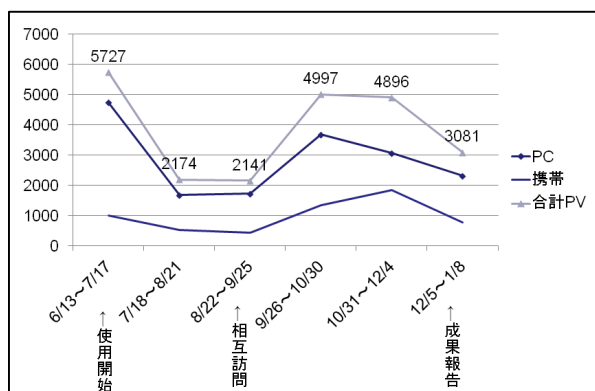


図 2 ページビューの推移

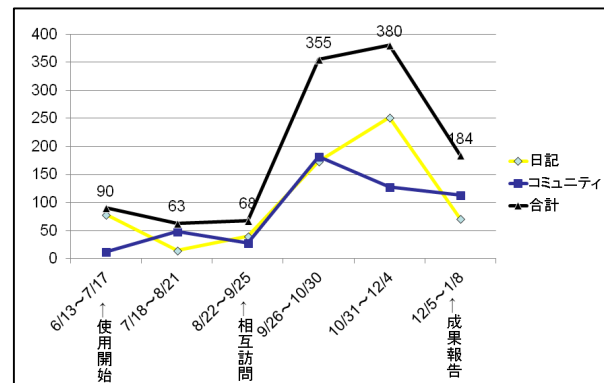


図 3 エントリ（発言数）の推移

相互訪問時に複数の学生から聞かれた声に、「訪問先の情報や活動プログラムについて知らないことがあった」というものがあった。これは、第 1 期に訪問活動に必要な情報の絞り込みや共有までには至っていなかったことを示唆しており、書き込みが少ないという結果と一致している。

3.3 コミュニティ

コミュニティの総数は 10 個であり、そのうち学生が立ち上げた 3 個のコミュニティは、それぞれ、自分自身のファイル置き場として作ったもの、山形大学生間の連絡用、および立命大学生間の連絡用である（表 3）。このようなコミュニティが作られたことから分かるように、SNS は学生自身のデータベースや、同一大学内での情報交換・交流のためにも使われており、後述するように、アンケートに現れた学生の意識としても同じ大学内の情報交換・共有手段としての利便性が認識されていた。

表 3 コミュニティ一覧

作成	テーマ	個数
教員	全員参加コミュニティ（一斉連絡用）	1
	キャンパスごとのコミュニティ（山形）	3
	キャンパスごとのコミュニティ（立命）	2
	趣味のコミュニティ（相互訪問後）	1
学生	山形大学生間の連絡・情報共有	1
	立命大学生間の連絡・情報共有	1
	立命大学生個人のファイル置き場	1

3.4 事後アンケート結果

SNS を使用した学生からの評価を得るため、交流終了後、参加学生に対してアンケート（5 段階

選択および自由記述形式)を実施し、12名中9名から回答を得た。ここで、活用状況に加えて、アンケート結果から SNS の成果と課題を検討する。

まず、SNS を使った感想として上位を占めた項目は、「コミュニティ機能を使って目的に応じた情報共有ができた」、「日記にコメントがあるとうれしかった」、「自分と同じ大学の学生とのコミュニケーションに役立った」であり、いずれも平均値4を超す高い値を示した。特に、「交流相手校の学生とのコミュニケーションに役立った(3.2)」と比較すると、大学内の他キャンパスの学生との情報交換・共有を高く評価していた(表4)。

このような結果となった理由として、両大学ともキャンパス間の距離が長く、学生同士が簡単に合うことが困難であることや、今回の課題が(相手校ではなく)、自分が所属している大学について報告することであったことがあげられる。

反対に低い値を示したのは、「実名で参加することには抵抗があった」、「SecondLife のようなバーチャルリアリティを使って交流したい(2.6)」、「交流活動へ参加していない学生も招待できればよかった(2.7)」であり、今回の SNS の設定に対する満足度がうかがえる。

一方、今後開発を希望する機能として、「動画のアップロード・公開」、「複数のファイルの一括アップロード」が高い値となり、より多くのファイル共有を求めていると言える(表4)。山形大の学生は、成果報告会のプレゼンテーションにビデオを用いたので、このような結果になったと推測できる。

表4 アンケート結果(上位項目・5段階評定法)

順位	項目	平均値
1	コミュニティ機能を使って目的に応じた情報共有ができた	4.63
2	日記にコメントがあるとうれしかった	4.50
3	このシステムは自分と同じ大学の学生とのコミュニケーションに役立った	4.44
1	動画をアップロード・公開できる機能	4.33
2	複数のファイルを一度にアップロードできる機能	4.00
3	アンケート機能	3.44

4 残された課題

以上のように、今回の交流を振り返ると、特に第3期において SNS は学生から活用され、また、学生の主観的な評価もおおむね良好であった。しかし、大学間の情報共有手段として積極的に使われるには、一層のファシリテーションが必要である。

さらに、学生の学びに焦点を当てて、SNS が貢献している部分を明らかにするには、より詳しい分析が必要である。今後は、活動ログや発言内容を詳細に解析し、PBL としての交流の設計自体にも踏み込んで、より有益な活用法を探りたい。

謝辞

交流に参加した両校の学生と、木野茂教授をはじめとする立命館大学の交流ご担当者に感謝いたします。

参考文献

- [1] 山形大学大学連携推進室、「平成 21 年度立命館大学・山形大学包括的協力協定に基づく学生交流成果報告書」、pp.3-14、山形大学、2010
- [2] 宮浦崇、西出崇、「学部教育における SNS 導入と展開」、日本教育情報学会年会論文集 25、pp.322-323、2009
- [3] 廣澤周一、「日本語による実践的コミュニケーションを促進する学びの場--ブログとコミュニティを活用した SNS 型異文化交流サイトの構築とその可能性」、教育システム情報学会研究報、24(7)、pp.32-35、2010
- [4] OpenPNE、<http://www.openpne.jp/> (2011 年 10 月 21 日確認)